

# 「～テクレル」の機能について

## —対人調節的な機能に注目して—

山本 裕子

キーワード 恩恵性、直接的な受け取り、間接的な受け取り、対人調節的機能、「場」における立場

### 1. はじめに

日本語の授受表現は「(～テ) クレル」「(～テ) モラウ」「(～テ) アゲル」の3系列にそれぞれの待遇形があり、全部で7つの形式からなっている。<sup>1)</sup> それらは行為者と話し手の関係や、話し手の視点、行為の方向性等、さまざまなファクターにより複雑な使い分けられている。授受表現の中では特に「(～テ) クレル」が諸言語と比較しても特殊であるといわれている。<sup>2)</sup> そこで本稿では補助動詞<sup>3)</sup>として用いられる「～テクレル」について、コミュニケーションにおける対人調節的な機能の面から考察する。

「～テクレル」を含む授受表現に関する先行研究は非常に豊富であるが、先行研究ではもっぱら構造上の特徴や意味の相違についての考察が中心となっており、談話レベルにおける機能についてはほとんど考察されていない。しかし授受補助動詞というのは実際のものやりとりではなく、行為に付随する恩恵のやりとりを表すものであるため、その運用の適切性はポライトネスの問題と直接的に関わっている。また授受表現は話し手の立場によって異なる系列が用いられ、またそれぞれに待遇形もあるので、敬語のシステムも含めて言語表現の選択、運用のし方を分析することにより、コミュニケーション上の機能と日本語のポライトネスの関係を捉えることが可能であると思われる。本稿ではそのための第一歩として、「～テクレル」が実際にどのように用いられているかの観察を通して、本来の用法である恩恵の表示から逸脱した用法があることを示す。そして逸脱した場合、話し手と事態の関わり方や、事態の参与者との関わり方によって異なる役割の「～テクレル」が用いられ、それぞれ対人的な関係を調整するような機能を果たしていることを主張する。また、これらの機能は、「～テクレル」の待遇形の選択とは直接的には関係のないものであると考える。

## 2. 先行研究とその問題点

本節では2-1で意味・統語面、2-2で視点に関して、2-3で対人調節的機能についての先行研究を概観し、その問題点を指摘する。

### 2-1 意味・統語面に関して（「～テモラウ」・「～テアゲル」と比較して）

「～テクレル」の意味に関しては、以下のことを共通認識とすることが可能であろう<sup>4)</sup>。

1. 「～テアゲル」は話し手（または話し手が話し手に近いと見なしている側、以下同様の扱いとする）が他者に恩恵を与えることを表す<sup>5)</sup>が、「～テクレル」は「～テモラウ」とともに、話し手が恩恵を受けていることを表す受益表現である。「～テモラウ」は話し手が主格に立つのに対し、「～テクレル」は恩恵の与え手が主格に立ち、話し手は恩恵の受け手の立場から事態を叙述するものである。

2. 「～テクレル」は基本的にガ格名詞句の「恩恵」の与え手に意味内容的な制約はない。

(1) a 雨が降ッテクレタ。

b \*雨に降ッテモラッタ。

(2) a 赤ん坊が寝テクレタ。

b \*赤ん坊に寝テモラッタ。

(1b)(2b)に示したように、いずれも「～テモラウ」では不適格となる<sup>6)</sup>。一方「～テクレル」の場合、話し手が恩恵を感じてさえいれば、制約なく用いることが可能であり、その意味でより主観的な表現だといえる。

3. 「～テモラウ」の恩恵の与え手が2で述べたような制約を満たすものであっても、「～テクレル」と単純には置き換えができるわけではない。「～テクレル」は受動的な恩恵の受け取りを表すものである。山田(2001b)によれば「～テモラウ」には使役的なものと、受動的なものがあるが、その最も受動的な性質のものが「～テクレル」と置き換えられるものである。

4. 「～テクレル」は非恩恵的な意味でも用いられるが、その場合、非恩恵的な意味であることは文脈から明らかである<sup>7)</sup>。例えば、下の(3)では「よくも」や「そんなこと」に事態をマイナスに捉えていることが明確に現われている。

(3)よくもそんなこと、ヤッテクレタな。

5. 「～テクレル」を含む授受補助動詞には直接構造と間接構造<sup>8)</sup>がある。直

接構造とは(4)のように行為の方向と恩恵の方向性が一致しているものであり、「～テクレル」を用いなくても項の増減はない。

(4)加藤さんは私に本を貸シテクレタ。

(4)は「加藤さんは私に本を貸した」という事態を「私」が「恩恵的」と見なしたために「～テクレル」が用いられたものである。このような場合、「貸す」という行為に「私」は必然的に含まれており、行為の方向と「～テクレル」の表す恩恵の方向性が一致している。間接構造とは事態に方向性がなく、恩恵の受け取りがあることを「～テクレル」で表すものである。恩恵の受け手を表す項が一つ増える。なお、この場合恩恵の受け手は「二格」とは限らず、「～ために」で表されることもある<sup>9)</sup>。

(5)加藤さんは私のために歌ッテクレタ。

(5)では、「加藤さんが歌う」という行為は「私」と無関係に行われるが、事態を「私」が恩恵的と捉えていることにより「～テクレル」が用いられている。

以上に示したように先行研究では「～テクレル」の意味に関して「(話し手が)恩恵を受けていることを表す」というようにほぼ一義的に捉えている。ただし、「恩恵を受けている」と言っても、その内容にはさまざまなものが含まれている。次の例を見られたい。

(6)講演会で司会者がゲストを紹介して

「今日は、A氏が経済動向について話シテクダサイマス。」

(7)Aが友人Bを夕食に誘う。

A：よかったら、晩ご飯食べていってよ。

B：え？

A：あ、でも都合が悪かったら、断ッテクレテいいからね。

(6)では話し手は司会者であり、ゲストが話すことによって直接的に恩恵を受けるわけではない。また(7)も、Bが誘いを断るとしたら、話し手のAは恩恵を受けるとはいえない。しかし、いずれの場合も「～テクレル」が用いられている。このように「～テクレル」があっても必ずしも話し手が恩恵を受けているとは言えない。どのような場面で用いられ、どのような相手に用いるかによって、「～テクレル」の果たす機能は異なると考えられる。このような「～テクレル」について先行研究では扱われていない。

## 2-2 視点をコントロールする機能に関して

日本語では話し手中心の視点をとる傾向があるという指摘がしばしばなされる<sup>10)</sup>。そのため、話し手以外の人物が関わる事態を叙述するにあたっては「～

テクレル」など授受補助動詞を含む視点を操作することが可能な構文を使用し、「視点を統一させる」と言われている<sup>10)</sup>。例えば田中(2001)では次の言語形式を視点を操作するものとしてまとめている。

(8) 「視点を統一するための言語的手段」

A 能動グループ(能動文、使役文)

B 視点転換の補助動詞(「～テクレル」、「～テクル」)

C 受動グループ(直接受身、使役受身、「～テモラウ」、間接受身)

そして、日本語学習者は(8)を使いこなせず、不自然な発話をしてしまうという。田中(2001)の例を見てみよう。

(9) S 1 : あ、今日、何かある？

T 1 : うん、今日？<ん>あのう、忘年会。

S 2 : 忘年会？私なぜ誘った、誘わなかったの？

T 2 : だって、こないだテストあるって、言ってたじゃん。

S 1 : うーん、でもテストはテスト、パーティはパーティじゃない。

(=田中2001:213 (K A03))

(10) (友人Aの結婚披露パーティーでスピーチをするロールプレー)

(Aさんは)友達が困った時にはすごく優しい笑顔で、あの説明してくれたり、助けを、助けてあげ、助けてあげるような、こう、行動をするので、友人としてとても誇りを持っています。

(=同:214 (K S07))

田中(2001)は「視点が決まればヴォイスも決まる」と述べており、(9)(10)のような誤用は次のように説明されている。(9)は「～テクレル」の非用による誤用である。この文は話し手の視点で述べており、話し手は恩恵を受ける立場にあるので、受益者であることを表す「～テクレル」が必要である。(10)では「～テクレル」と「～テアゲル」が同時に用いられ、話し手の立場が一貫していないことによる誤用である。(9)のような誤用はこれまではポライトネスの観点、つまり「～テクレル」のもつ恩恵性から説明されることが多かった。これに対し田中(2001)は「視点を」を一貫させる必要性から授受補助動詞が使用されると説明している。確かに「話し手の視点で一貫させる必要性がある」ということにより、(9)(10)の誤用は部分的には説明できるであろう。しかしこれでは「～テクレル」が可能で「～テモラウ」が不適切な場合、またはその逆のケース、あるいは同じ視点をとるグループ内での選択、例えば「～テクレル」と「～テクル」の選択がどのように行われているかについては説明できない。それにはやはりそれぞれ語の意味的な相違に基づく説明が必要となる。

また、第三者間の行為が「～テクレル」で表されることがあるが、この場合、

行為の受け手が話し手自身ではなくても、話し手の視点は受け手の側にある。

(1)山田さんが弟にケーキを焼イテクレタ。

(1)のような「～テクレル」は、先行研究では話し手の視点が話し手の身内である弟にあるため、弟の立場で述べているとされている。この「弟の立場」にたつて述べるということには2通りの考え方があつた。一つは久野（1978）に代表されるように「弟と同様に感謝の意を持って」というようにempathy（共感度）も含めて考える立場である。もう一つは西川（1995）、Obana（2000）、山橋（1997）等に見られるもので、「弟」は山田さんの行為の受け手であり、話し手も受け手の立場から述べているが、感謝しているのはあくまでも話し手自身であると考える立場である。しかし、(1)では「弟にケーキを焼いてくれるとは、山田さんはなんていい人なんだろう」というように話し手自身が山田さんに感謝する場合と、「山田さんにケーキを焼いてもらうとは、恐らく弟は嬉しいだろう」と弟の立場に共感する場合とがあり、両者は明確には区別できないと考える。よつて本稿では、第三者間での「～テクレル」を話し手が行為の受け手の立場から述べているが、「感謝の気持ち」については話し手自身が感じる場合と「弟」が感じる場合と両方あり、場合によつて異なるものとする。

### 2-3 対人調節的機能について

1でも述べたように「～テクレル」も含め授受補助動詞の対人的な機能についてはほとんど研究されておらず、橋元（2001）、田中（2001）等に若干の記述が見られるのみである。ここではそれらについて概観し、その問題点を指摘する。橋元（2001）はリーチ（1987）の「気配りの原則」を日本語に適用し、日本語におけるコミュニケーション上のルールについてまとめている。それには授受表現の使用が関わっているとし、次の原則を提案している。

(12)恩義強調の原則：相手が施す恩恵もしくは依頼者に生じる義理を最大限言明せよ

(13)互酬性に基づく親密さの原則：自分が施す恩恵を言明し、相手に義理感情を派生させることにより、絆の深さが確認され、関係の親密さがアピールできる

(12)は「～テクレル」や「～テモラウ」の使用に関わる原則である。「私に本を送っていただけますか」や「私に本を送ってくださいますか」のように相手の行為に関して「～テクレル」や「～テモラウ」を用いて表現することにより、「相手から私に対する恩恵が施されることが明示され、同時に受益者の私に義理が発生することも含意されている（pp.49-50）」。

一方(13)は「～テアゲル」に関するもので、自分が与える恩恵についての表現

である。「弁当を作ッテキテアゲヨウカ」のようなものは、(12)には反する。しかし、これは(13)に基づいて使用されており、そのため親しい間柄でしか使えないものとなっていると述べられている。

以上のように橋元（2001）は語用論的な原則をたて授受補助動詞の運用上のルールを示している。これにより、田中（2001）の次のような例も説明できる。田中（2001）は(14)の例をあげ、「～テクレル」が否定形で用いられると「不満表明」となると述べている。

(14) T： どうして日本に来ようと思ったんですか。

S： どうしてって、だから、もっと自分の勉強を、…中略…だからその深く教えてくれないんです、＜あー＞ただ基本的な知識とか…略…＜あー＞それだけ教えてもらったから……

（同：215（K I H01））

田中（2001）は、(14)について「相手に恩恵行為を強要するような感じ、相手に責任がある、不満に思っているような印象を与える。本音を話してよい場面であれば、この『てくれる』の使い方は適格であるが、公の場面（面接等）では教えてもらえない」としたほうが謙虚に聞こえる（同215）と述べている<sup>19)</sup>。

「～テクレル」の否定形が不満表明のような表現効果をもつことは、橋元（2001）の原則(12)で説明できる。(12)では「相手が施す恩恵もしくは依頼者に生じる義理を最大限言明せよ」とされているので、相手が恩恵を施さなかった場合、それを言明することは著しく配慮を欠くことになると考えられる。

このように橋元（2001）の原則は確かに有効な面もある。しかし捉え方が非常に大雑把であるため、実際の「～テクレル」の用例を一つ一つ見ていくと説明できないものも多いと思われる。(13)の原則にしても、「～テアゲル」によってより親密な関係になりうる場合ももちろんあるであろう。しかし、常に「～テアゲル」を用いたほうが親密な関係になるとはいえないことは明らかである。また2-1で挙げた(4)のように恩恵性があまり感じられない「～テクレル」や(5)のように実際には話し手が恩恵を受けない「～テクレル」も(12)で説明できるのであろうか。以上のことから、橋元（2001）では「～テクレル」全体については説明できず、機能の考察としては不十分なものと思われる。

### 3. 「～テクレル」の機能

本節では、談話の中で「～テクレル」が果たしている対人調節的な機能について検討する。対人調節的な機能を考えるにあたり、次のことを考慮する。

1. 恩恵の実質性。「～テクレル」が恩恵的な意味で用いられているかどうか。
2. 話し手、聞き手、行為者等、事態に参加している人物と事態との関係。
3. 話し手の受けているもの。恩恵を受けているのかどうか。

以下、まず3-1で「～テクレル」の本来的な用法を確認し、3-2で意味が反転している用法を見る。次に3-3では「～テクレル」の恩恵性を利用してそれを対人関係上のストラテジーとしている場合について見る。3-4では話し手が間接的に事態に関わっており、「～テクレル」の恩恵的な意味が薄く、恩恵性の表示としてではなく、むしろ話し手が「場」にどのように関わっているのを明確にするために用いられている場合についてみる。

### 3-1 ①本来的用法：話し手が恩恵を受けていることを示す機能

先行研究に述べられているように、「～テクレル」は話し手が事態を「恩恵的である」と見ていることを表現するものである。聞き手を含む他者による意図的な行為の場合もあるが、非意図的な（話し手目当てではない）行為や、自然現象の場合もあり、さまざまな事態に対して感じる恩恵を表す。

(15) ありがたい。永尾くんはいつもあたしの気持ちをすくいあげてくれる。

高校の時もそうよ…いつもさりげなくかばってくれて…

(東京ラブストーリー 1 p.75)

(16) (飼い犬が) 家の外に逃げちゃってね。逃げたってゆうか、遊びに行っちゃって、畑ん中をかけずり回って、(はあん) そしたら、近所の人が 見つけてくれてね、(ええええ) その人がさん、その人が散歩して (ええ) 一緒について (ええ) 帰ってきたんだって。(ことば 10-5117<sup>13)</sup>)

(15)は恩恵の与え手が聞き手(永尾くん)の場合、(16)は第三者の場合である。いずれもその行為を恩恵的なものとして受け取った話し手の気持ちを表している。特に(15)では「近所の人」は話し手のために当該の行為をしたわけではないが、話し手にとってそれは「ありがたいこと」と認識されている。このように話し手が恩恵を受け、ありがたいと思っている気持ちを表すのが、「～テクレル」本来の使い方である。また、このような場合には必ずプラスの内容が後続する。

(16)a 近所の人が見ツケテクレテね、嬉しかったんだ／助かった。

b \*近所の人が見ツケテクレテね、困っちゃったんだ。

c 近所の人が見つけて、困っちゃったんだ。

マイナスの内容が後続する場合は、「～テクレル」を用いると(16)bのように不適格であり、(16)cのように「～テクレル」を伴わなければ適格となる<sup>14)</sup>。

このような「～テクレル」の本来的な用法は橋元(2001)の「恩義強調の原

則」に適うものである。(15)(16)では話し手はおそらく本当に相手の行為に対して恩恵を感じ、それを表明しているのであろうが、実際には恩恵を感じているかどうか分からない場合もある。

(17) AとBは友人。Bが近々二人目を出産することに関して話している

A：二人目の出産で、実家に帰らないとなると、大変じゃない？

B：うん。でも、まあ、家にはお義母さんがイテクレルから。

嫁と姑の仲は悪い可能性もあり、話し手Bが姑に対し本当に恩恵を感じていない場合もありうるであろう。しかし、「～テクレル」を用いていることによって、少なくとも表面的には恩義を感じていることになり、それを示すことで人間関係はスムーズになると思われる。実際に恩恵を感じているかどうかに関わらず、一般的にそのような状況においては受け手の立場であれば感謝するだろうという想定が成り立つような状況で「～テクレル」を用いることが「恩義強調の原則」に適うものであろう。以上を踏まえ、次に本来の用法とは異なる機能のものを見ていく。

### 3-2 ②非恩恵的な意味「皮肉」を表す「～テクレル」

次に「～テクレル」が非恩恵的な意味を表す場合に見られる機能について見る。これは聞き手の行為を否定的に捉えている場面で用いられる「～テクレル」に見られるものである。話し手が事態に対してマイナスの感情を抱いているにも関わらず、恩恵的な意味、つまりプラスの意味を持つ「～テクレル」を用いることにより、「皮肉」を表している。

(18) 子どもがおもらしをして

a うわー、いいところでヤッテクレタね。

b うわー、いいところでヤッタね。

(19) (友人に「もしかして最近太ったんじゃない?」と言われて)

a うわー、いやなこと言ッテクレルねー。

b うわー、いやなこと言ウねー。

(18)(19)では話し手は受益者ではなく被害者である。いずれも恩恵的ではない事態に本来恩恵を表す「～テクレル」が用いられており、「皮肉」となっている。間接構造である(18)の場合、(18b)のように「～テクレル」を用いないと、事態に対する話し手の感情的評価が明示されない。「～テクレル」を用いることによって、話し手が事態に対して何らかの感情的な関わりをもっていることが明確になる。一方、(19)のような直接構造では、「～テクレル」がなくても話し手が「文句を言う」行為の受け手であることは分かる。しかし(19a)のように「～テクレル」を用いることで、話し手がその事態に抱いている感情的な評価が一層表される。

先行研究で指摘されているように、このような非恩恵的な意味は、文脈によって生じるものである<sup>15)</sup>。それは(19)の「いやなこと」のように言語的に示される場合もあれば、(18)のように状況による場合もある。また、行為の与え手は(19)のように聞き手である場合も、第三者の場合もある。

このような皮肉の「～テクレル」は、行為の仕手との関係や、事態が話し手に与える影響の大きさによって、対人的にはプラスにもマイナスにも作用する。例えば(19)の場合、友人も「もしかして最近太ったんじゃない？」という発話が相手に対してマイナスの影響を及ぼすものであることは承知しているはずである。しかし(19a)のように「～テクレル」を用いることによって、「皮肉」として受け取る余裕があることを示すことにより、聞き手である友人に対するマイナスの影響が緩和される。逆に、例えば野球の試合の大事な場面で、ある選手がエラーをしたような場合に、「またやってくれたよ」と監督が言ったとする。このような場合、エラーをした選手は「またやったよ」と言われるよりも、監督（チーム）の受けた被害は大きいように受け取るのではないか。プラス、マイナスのどちらに作用するかは状況によって異なるが、これは「～テクレル」の有する機能ではなく、「皮肉」の持つ機能であると考えられる。

「～テクレル」と同じように方向性を示し、話し手が受け手であることを表す形式として「～テクル」がある。しかし、下に示すように「～テクル」は常に用いることができるわけではない。

(20) \*いいところでやってきたね。

(21) \*いやなことをいつてきたねー。

(22) あの人がまた文句を言ってきた。

(22)のように報告的に用いることは可能だが、(20)(21)のように事態に対してその場で直接言及する場合、「～テクル」を用いることはできない。(23)(24)で示したように「～テクレル」であれば可能になる。

また、被害を受けていることを表すものとして受身形「～ラレル」があるが、聞き手に被害を直接訴えかける場面では文末で言い切りの形式では使えないようである。(23)(24)を見られたい。

(23) \*さっきは、いいところでヤラレたね。

(24) \*いやなことを言ワレルね。

しかし(25)のような形式にすると適格になる。

(25) そんなことヤラレると、困ります。

以上のことから、話し手が事態を否定的に捉えている際には叙述の形式に制約のあることがわかる。

②の非恩恵的な「～テクレル」は聞き手が目上の場合や、ソトの関係にある

人に対しては用いることができず、親しい、ウチの関係にある人に用いるものである。聞き手が行為者の場合、その行為に対する否定的な評価を伝えるので、この配慮は当然必要であろう。

### 3-3 ③非恩恵的な意味「挑発」を表す「～テクレル」

②では話し手は行為の受け手であったが、話し手が行為者として聞き手または第三者に対して被害を与える場合にも「～テクレル」が用いられる。

(26) お前をギャフンと言ワセテクレル。

(27) あいつに目にも見セテクレヨウ。

これは②と行為の方向性が逆になっている。このような「～テクレル」は「～テクレル」や「～テクレヨウ」の形式で用いられ、形式的に偏りが見られる<sup>16)</sup>。「～テクレル」を用いないものと比較してみよう。

(26) ギャフンと言わせる。

(26)のように「～テクレル」を用いない表現では、行為の及ぶ先は聞き手以外の第三者の場合が普通であり、話し手に関わりのない事態の叙述にも用いられる。しかし(26)のように「～テクレル」がある場合、聞き手に対して直接用いることもできる。また話し手が行為の向かう相手に対して話し手が対抗的な気持ちを持っていて、挑発的な態度をとっていることが表されている。よって、この「～テクレル」は行為の方向性を明確にするとともに、相手に対する話し手の対抗的な姿勢も明確する役割を果たしていると言える。

### 3-4 ④話し手・聞き手の立場を反転させ、聞き手の負担を軽減する「～テクレル」

次に実際の受益者は聞き手であり、話し手ではないにも関わらず、「～テクレル」が用いられ、立場を反転させることによって、聞き手の負担を軽減しようとするものを見る。この場合、行為者は基本的に聞き手である。

(28) Aが友人Bを夕食に誘う。

A：よかったら、晩ご飯食べていってよ。

B：え？

A：あ、でも都合が悪かったら、断ッテクレテ構わないよ。

(29) A Bは友人同士、Aの家にBが遊びに来ている場面

A：これ、うちの子はもう着ないんだけどさ、Cちゃん、使わない？

B：え、うん・・・でも、いいの？

A：うん。あ、でも好みに合わなかったら、捨テテクレテいいからね。

いずれも話し手から聞き手に何らかの申し出がなされている。この場合、話し手は聞き手にとって益になる内容のつもりで話を持ちかけているが、実際は益

にはならない可能性がある。聞き手の反応から、気が進まない様子を感じ、「断ッテクレテ構わない」のように持ちかけている。「～テクレル」によって、「断ることは私（話し手）の利益になるので、あなた（聞き手）が申し訳なく思う必要はない」ということを示すことになる。この「～テクレル」は聞き手が話し手の提案を退ける際の心理的な負担を軽減するものと考えられる。

### 3-5 ⑤話し手の「場」における立場を示す「～テクレル」

本節では「～テクレル」の恩恵性が間接的なものになっている場合について見る。恩恵性が間接的であるとは、事態の実現の結果、話し手も恩恵を受けないわけではないが、直接的に恩恵を受けるわけではなく、「場」の一員として恩恵を受けることである。この場合「～テクレル」は話し手が「場」の構成員であること、及びその場面にどう関わっているかを示す機能を果たしている。

まず、次の例を見られたい。

(30) (司会者が) では次はAさんが発表シテクダサイマス。

(31) (小学校の教員同士で音楽の授業の進め方について話している)

A: でも、徐々にレベルあげていってねー。

B: そうよね。それはもう、専科がいる場合は、ばっちり考えてくれるからだいじょうぶよ。(ことば 2-3841)

ここでは「～テクレル」は「場」における話し手と聞き手の立場の共通性を強調し、「我々意識」を生み出そうとする機能を果たしている。第三者の行為について、その人を「ソト」とし、聞き手を含む「私たち」を「ウチ」とするものである。(30)では話し手は司会者であり、実際には聞き手（聴衆）と同じようにAさんの発表から恩恵を受けるわけではない。しかし(30)では聞き手（聴衆）と同じようにAさんの発表を聞く立場であるという話し手の意識が示される。また(31)では話し手Bと聞き手Aはともに「専科ではない者」として立場を共有するものであるという意識が示されている。(30)(31)では特に話し手のために行為がなされるわけではなく、「場」全体がその事態の実現によって恩恵を受ける。つまり話し手自身が直接的に恩恵を受けるわけではない。よって、ここでは「～テクレル」は恩恵性を表すために用いられているというよりは、話し手が「場」に関わっていること及び聞き手との立場の共有性を示すものと考えられる。これらを「～テクレル」を伴わないものと比較してみよう。

(30)次はAさんが発表します。

(31)専科がいる場合は、ばっちり考えるから大丈夫よ。

(30)(31)と比較すると、「～テクレル」を用いないものは単に第三者の行為を叙述するだけである。「～テクレル」を用いたものは、誰がその行為を行うのかに加え

て、行為者に対する話し手（そして聞き手）の立場が明確になっている。つまり、話し手と聞き手が「場」の構成員として関わっており、かつ立場を共有していることが示される。Obana（2000）はこれに相当するものを次の例をあげて指摘している。

(32) 皆さん、今日はこの方が話していただきます。

(=Obana2000:250 3-48)

Obana（2000）は話し手は単に司会者として関わっているだけであり、聞き手（聴衆）との何らかの関係性を示す必要性はないが、話し手と聞き手が同じ「ウチ」に属していることを含意するために「～テクレル」を用いることはよくあると述べ、話し手は一時的、心理的なウチ意識を聞き手に強調しているとしている。つまり、聞き手と話し手が同じ側に立ち、ウチを形成し、「この方」をソトとしてその行為から恩恵を受けるという構図を生み出す。このように第三者の行為に対し「～テクレル」を用いることによって、話し手と聞き手が一時的に（心理的に）ベースを共有していることが表されると考えられる。そして第三者について述べる場合であれば、恩恵的な事態の場合も非恩恵的な事態の場合もある。

(33) A：あの人、いつもこれで終わりってところで、何か言ッテクレルんだよね。

B：そうそう。それで長くなるんだよね。

(33)では「～テクレル」が皮肉として用いられているが、Cさんについてのマイナス評価をA、Bで共有しようとするものである。

「～テクレル」の主格に立っている第三者も、「私たち」と同じ「場」に属し、「場」で期待される役割を果たしているものであるため、全体としては大きな「ウチ」の関係にある。よってこれは「場」という「ウチ」の中で、話し手と聞き手がさらに立場を同じくする「ウチ」の関係にあるということを用いるものであり、連帯感を強調するものと考えられる。話し手と聞き手が共有のベースを持っていることを示す形式として、山本（2001）では「～テクル」を指摘している。共有ベースを表す「～テクル」とは次のようなものである。

(34) あ、あの手紙出シテキタよ。

(35) 先週、京都へ行ッテキマシタ。

「手紙を出した」にしろ「京都に行った」にしろ、当該の行為自体は話し手一人で行ったものであるが、「～テクル」を用いるにあたって、話し手と聞き手にはその行為について何らかの共有の前提がある。(34)では共有の前提があることは「あの手紙」に明確に表われている。(35)では(34)のように明示的ではないが「旅行の報告をする場面」など報告が行われるというような談話の展開に関し

て共有の前提があると考えられる<sup>17)</sup>。「～テクレル」の場合も同様で、話し手と聞き手が同じ立場で（例えばこれから講演を聴くのように）あることは聞き手もわかっているのだが、「～テクレル」によって強調され、補強される。

### 3-5 「～テクレル」の対人調節的機能のまとめ

以上、「～テクレル」が本来的に持っている「話し手の恩恵の受け取りを表す」という意味を利用することにより、聞き手との関係をより円滑にする調整する機能を持つことを指摘した。

まず①として「～テクレル」が本来持っている意味を確認した。次に②③として、その意味を反転させることにより「皮肉」あるいは「挑発」として用いられ、「皮肉」は状況によって対人関係的にはプラスにもマイナスにも作用するが「挑発」はもっぱらマイナスに作用することを述べた。さらに④として本来の「～テクレル」とは話し手、聞き手の立場を逆転させたものがあり、話し手の申し出を断ろうとしている聞き手の負担を軽減する機能のあることを指摘し、⑤として本来の「～テクレル」の恩恵性が薄れ、形式化し、「場」における話し手の立場を示すもののあることを指摘した。以上を表1に示す。

表1

	意味	与え手（主格）	受け手	恩恵との関係
①本来的	恩恵の受け取り	聞き手・第三者	話し手	直接的
②皮肉	被害の受け取り	聞き手第三者	話し手	直接的
③挑発	被害を与えようとする	話し手	聞き手・第三者	直接的
④反転	(恩恵の受け取り)	(聞き手)	(話し手)	直接的
⑤立場	(恩恵の受け取り)	第三者	話し手 聞き手	間接的

表1は「～テクレル」が内在的に持っている機能の一部に注目してまとめたものである。( )書きは、見かけ上のものであることを示す。話し手が受け取るものは「恩恵」として一括したが、②③の場合は「被害」である。表1に示したように、①②は意味の上で反転している点が異なるだけである。つまり①と同じ形式が文脈により②になりうるということがわかる。また恩恵の与え手は、①では制約がなく、聞き手の場合も第三者の場合もあるが、④では聞き手に限定され、⑤では第三者に限定される。①～⑤は、①を中心として、②～⑤は互いに隣接した連続的な関係にある。②は意味的に反転したものであるので、④⑤

においても非恩恵的な意味の「～テクレル」も用いられる。

次に対人調節的な機能を③6)にあげた要因に注目して分析する。

③6) 1 場面の改まり度：公・私

2 状況：参加者は各々どのような働きかけをしようとしているか

3 話し手と聞き手の関係：上・下（上司と部下など役割関係）ウチ・ソト

4 行為者との関係：行為者（主格に立つ人物）が聞き手でない場合、その人物と話し手との関係 上・下 ウチ・ソト

5 効果（語用論的ポライトネス）：対人関係上生じる効果

表1の①～⑤に上記の1～5がどのように関わるかを表2にまとめて示す。

表2

	1 改まり	2 状況	3 聞き手との関係	4 行為者との関係	5 効果
①本来	公・私	制約なし	制約なし		+
②皮肉	私	被害を受ける	ウチ 対等・目下	ウチ 対等・目下	+/-
③挑発	私	被害を与える	ウチ 対等・目下		-
④反転	私	聞き手に申し出	ウチ 対等・目下		+
⑤立場	公・私	聞き手と「場」を共有	ウチ	ソト	+

表2に示したように、①は基本的に制約がない。②③④は実際には恩恵を受けていなかったり、逆に被害を受けているような状況で用いられるものである。「～テクレル」が本来は恩恵の受け取りを表すということから、聞き手の負担を軽減するなど対人関係を調節するような機能を果たしている。また②③では「被害」のやりとりがあるが、それを「～テクレル」で表すことによって話し手の何らかの感情を表し、状況によってプラスあるいはマイナスに作用する。④では事態に恩恵のやりとりがあると仮定して、それによって聞き手を恩恵の与え手として「持ち上げる」ために「～テクレル」が用いられている。⑤では「～テクレル」が恩恵の受け取り自体を表すのではなく、同じ「場」を共有していることが示されている。聞き手を含む参加者との関わり、つまり「場」の中での話し手の立場を明確にし、さらに話し手にとっての聞き手の立場も明確になる。このようにして⑤も聞き手に対しての配慮を表している。また⑤はソ

トの関係にある人物、つまり待遇的な配慮が必要な相手に対して用いられるものでもある。この「～テクレル」は敬語の使用に通じる性質を持つように思われる<sup>18)</sup>。

#### 4. おわりに

本稿では「～テクレル」が談話においてどのような対人的機能を果たしているかについて考察を行った。「～テクレル」は本来恩恵的な意味を表し、それによって対人関係を円滑にするような機能を持っているが、恩恵的な意味を利用し、話し手を恩恵の受け手と設定することによって、相手の立場を「持ち上げる」形で配慮をしているものや、非恩恵的な事態においては、その程度が大したものではないという話し手の受け取り方を示し、行為者に対して負担を軽減するような「～テクレル」を指摘した。また本稿で指摘した機能には、「～テクレル」と「～テクダサル」の形式のどちらか一方がもっぱら用いられるというような形式的な偏りは見られなかった。待遇形の選択は話し手と聞き手との関係によって社会慣習的に決まるものであり、対人調節的な機能の選択とはレベルが異なるものと考えられる。

今後は、例えば「挑発」を表す場合「～テクレル」と「～テヤル」でどのような相違があるか、または「恩恵性」が薄い場合の「～テクレル」は「～テモラウ」と通じる用法が多いように思われるが、どのような相違があるか等の検討を行い、それぞれの機能、特徴について考察を深めたい。

#### 注

- 1 待遇的なバリエーションとして「～テクレル」には「～テクダサル」、「～テモラウ」には「～テイタダク」、「～テアゲル」には「～テヤル・サシアゲル」がある。以下カタカナで表記する場合、各々の待遇形式を含むものとする。
- 2 庵（2001：126）など多くの先行研究に指摘されている。
- 3 本稿では動詞がその実質的な意味を失って機能語化しているものうち、動詞のテ形に接続しているものを「補助動詞」とする。
- 4 「～テクレル」に関しては寺村（1982）、堀口（1987）、西川（1995）、山橋（1997）他多数の先行研究がある。

- 5 「加藤さんが伊藤さんに写真を見セテアゲタそうだ」のように「～テアゲル」は第三者から第三者への行為を表すことも可能である。
- 6 山橋（1997）参照。山橋（1997）は「～テモラウ」では与え手が有情で、なおかつ成熟した大人である必要があると述べている。確かにそのような傾向はあるが、「仕事をしている間、赤ちゃんには隣の部屋で寝てもらっていた」のように「未成熟な与え手」でも「～テモラウ」が可能な場合もある。よって「成熟した大人」とまではいえないのではないか。
- 7 山田（2001 b）はこのように恩恵的であるか、非恩恵的であるかは文脈に依存することから、「～テクレル」（を含む授受補助動詞、山田ではベネファクティブ）が内包するより強い性質として「方向性」があると述べている。
- 8 直接構造、間接構造については山田（2000）等、山田の一連の研究を参照。
- 9 「二格」を基本とするが、(5)のように「～のために」等の場合もある。受益者の格表示については大曾（1983）などで詳しく考察されている。
- 10 「～テクレル」等と視点については大江（1975）、久野（1978）などを参照。
- 11 実際には「～テクレル」を含まない「\*教えないんです」は非文法的であるが、「教える」を用いて論じることの妥当性についてはここでは扱わない。「～テクレル」等を用いないと適格にならない動詞群の存在は久野（1978）や山田（2000）等で指摘されている。
- 12 「～テクレル」と同じく受益表現である「～テモラウ」が含まれた「～テモラエナイ」であれば適切であるとされているが、これは「～テモラエル」と可能形が用いられていることによると考えられる。これについて詳しくは今後の課題とする。
- 13 『女性のことば・職場編』の自然談話データ、No.10の談話で発話行番号5117のものであることを示す。以下同様の扱いとする。
- 14 ここでは(16)のみを示し、(15)については示していない。これは「～テクレル」に前接している動詞の意味素性によって後続する内容に制約があると考えられることによる。(16)の「見つける」のように中立的なものと比べ、(15)は「(落ち込んでいる心を)すくいあげる」でありプラスの意味素性を持っているため、マイナスの内容を後続させることができないと考える。
- 15 皮肉に関しては瀬戸（1997：119-146）を参照。
- 16 「挑発」の意味は「～テヤル」でも表される。「～テヤル」には形式的な制約はないので、「挑発」を表すには「～テヤル」のほうが一般的だと考えられる。
- 17 「～テクル」の共有ベースについて、詳しくは山本（2001）を参照。
- 18 授受補助動詞の敬語と類似した性質は、「～テモラウ」により顕著に感じら

れる。例えば「次の角を右に曲ガッテイタダイテ」のような「～テイタダク」には恩恵性よりも聞き手に対する丁寧さを感じられる。このような運用については今後の課題としたい。

## 引用文献

- 庵 功雄 (2001)『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える』スリーエーネットワーク
- 大江三郎 (1975)『日英語の比較研究 - 主観性の表現 - 』南雲堂
- 大曾美恵子 (1983)「受動詞文とニ格名詞句」『日本語教育』50号 pp.118-124  
日本語教育学会
- 久野暉 (1978)『談話の文法』大修館書店
- 瀬戸賢一 (1997)『認識のレトリック』海鳴社
- 田中真理 (2001)「ディスコースと日本語教育」平澤洋一編『日本語教育学シリーズ第5巻 認知文論』pp.183-229 おうふう
- 寺村秀夫 (1982)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- 西川真理子 (1995)『『てくれる』についての一考察 —『てやる／もらう』との比較から—』『言語文化研究』21 大阪大学 pp.241-253
- 橋元良明 (2001)「授受表現の語用論」『言語』30巻5号大修館書店 pp.46-51
- 堀口純子 (1987)『『～テクレル』と『～テモラウ』の互換性とムードの意味』『日本語学』6巻4号 明治書院 pp.59-72
- 水谷信子 (1985)『日英比較話しことばの文法』くろしお出版
- 森田良行 (1995)『日本語の視点』創拓社
- 山田敏弘 (2000)「日本語におけるベネファクティブの記述的研究 第1回 ベネファクティブの視点の位置と方向性」『日本語学』第19巻11号 明治書院pp.94-103
- (2001 a)「同 第6回 非恩恵型ベネファクティブ」『日本語学』第20巻4号 明治書院 pp.90-101
- (2001 b)「同 第7回 テモラウ受益文の使役的性質と受身的性質」『日本語学』第20巻5号 明治書院 pp.102-112
- 山橋幸子 (1997)『『てくれる』の意味機能—『てあげる』との対比において—』『日本語教育』103号 日本語教育学会 pp.21-30
- 山本裕子 (2001)「聞き手とベースを共有することを表す『～ていく』『～てくる』について」『日本語教育』110号 日本語教育学会 pp.52-61

リーチ、G (1987)『語用論』池上嘉彦・河上誓作訳 紀伊国屋書店  
Obana,Yasuko (2000).*Understanding Japanese* : Kuroshio Publishers

### 例文出典

「自然談話資料FD」現代日本語研究会編『女性のことば 職場編』(1999)、ひ  
つじ書房  
柴門ふみ『東京ラブストーリー』(1990)、講談社